

アメリカ学会会報

— The American Studies Newsletter —

No.209

July 2022

最高裁はつらいよ（?）

岡山 裕

本稿を執筆している5月には、人工妊娠中絶を受けることを一定の範囲で女性の憲法上の権利としたロウ対ウェイド判決を、合衆国最高裁判所（以下、最高裁）が覆す見通しとのリーク情報が出て大きな注目が集まった。会員の皆さんがこれを目にする頃には、判決が出ていることだろう。

同じ頃、日本のプロ野球では、ある審判が判定に不満を示した選手を威嚇したり、その審判への暴言で選手や監督が退場になったりして話題になった。判定には選手らの生活がかかっており、争いが生じれば試合の進行が妨げられるから、これはこれで深刻である。プロ野球の審判と最高裁は、どちらもある基準に則って、一方当事者に肩入れせず判定を行うことを期待される。ただし、そこには裁量の余地があり、判定が受け入れられるかは多分に判定役への信頼にかかっている。

最高裁にはいかにも権力がありそうだが、実は野球の審判と比べてもいくつかの弱みを抱える。野球では審判抜きに試合ができず、選手やチームは審判と折り合いをつける動機づけが強い。他方、人々は最高裁を重要と捉えながら、非民主的と批判し、判決を無視することまである。また審判はどのチームからも距離があるが、最高裁の裁判官は特定の政党の大統領に任命される点で党派性を持つ。とくに今日では、それが特定のイデオロギーと対応しているとされ、判断の偏りが疑われやすい。

実際多くの人々は、裁判官が憲法に忠実であるべきと考えつつ、党派的・イデオロギー的にも行動しているとみていよう。例えば2000年のブッシュ対ゴア最高裁判決について、共和党支持者に裁判官が憲法に従って行動したと捉えた者が多く、民主党支持者に対立する立場の裁判官が党派的に振る舞ったと批判する者が多かったのはその表れといえる。

最高裁では20世紀末から、イデオロギー的立場の明確な裁判官が比較的若くして任命され、長期間在籍した後に同じ党派の大統領の在任中に引退するというパタン

が繰り返されてきた。裁判官の行動が多分にイデオロギーに左右されているように見え、裁判官の急死といった不測の事態でしか（ときには不測の事態でも）裁判所の党派構成が変わらない状況が続いている。そのうえで、裁判所のイデオロギー構成に沿った内容の判決が出されれば、上のような人々の態度も自然といえる。

しかし、人々が現状を望ましいと考えているわけではないことは、この間最高裁を信頼すると答える市民の割合が減少し、今では約4割と史上最低の水準に落ち込んでいることから明らかだろう。人工妊娠中絶規制の是非等、人の生き方に関わる価値をめぐる争点は、論争的な一方で票にならないので、議会は扱おうとせず司法に押しつけがちになる。イデオロギー的にみえる最高裁が重要問題に決着をつけることも、判決に納得できない人々の不信を強めうる。

最近では、裁判官を特定党派の代表とみる見方が一層強まっているようにみえる。それは、高齢の裁判官に対して同じ党派の大統領の在任中に引退するよう求める動きに示されている。今回の判決文草稿のリークを受けて、引退の要請を拒みつけて2020年に亡くなったルース・ベイダー・ギンズバーグ裁判官について、民主党政権期に引退していたら判例変更を防げたはずだという声まで上がっているのは、象徴的である。

今年初めに引退を表明したスティーヴン・ブライヤー裁判官は、昨年行った講演で、裁判官が熟慮や協議を通じて市民に受け入れられる判決を出すべく尽力してきたことを強調している。しかし彼自身、引退時期の判断に政治状況を考慮に入れることを否定しない。ますます党派的な装いを強める最高裁は、裁判官の「自助努力」で人々の信頼をつなぎ止められるだろうか。保守が明らかな多数派となった最高裁へのリベラル派の反発度合いを見ても、現状は司法制度へのかなり過酷なストレス・テストの様相を呈しつつあるように思える。

（慶応義塾大学）

新会長挨拶

2022年6月4日、5日に中央大学・多摩キャンパスで行われた年次大会で会長に就任いたしました。本当に微力ではございますが、これから2年間、会員の皆さまの研究・教育活動に貢献できるようにアメリカ学会の一層の発展に尽力してまいります。

ここ数年のアメリカ学会はまさに激動の時代でした。2020年春からの新型コロナウイルスの感染被害というまでもなく学会運営そのものを大きく変えました。同年には対面の年次大会開催を見送らざるを得ず、翌21年には慶応義塾大学がホスティングをする形でオンライン大会となりました。常務理事会も選挙管理を除けば、基本的には完全非対面のオンラインに移行しました。この難しい数年間の学会運営のかじ取りをしていただいた、高橋裕子、宇沢美子両会長に心から感謝申し上げます。

コロナ禍でもしかしたら会員の皆さんの身近な方にも被害が及んでいるかもしれません。それまでの研究生活は根本的に変わり、長期的な海外研修など描かれてきた研究の夢まで延期したり、あきらめた方もいるかもしれません。皆さんの心労、いかばかりかと胸が痛みます。

一方でこのような時期こそ、「グローバル化とは何か」という言葉を真剣に考える良い機会かと思っています。なぜならコロナ禍は「グローバル化」の負の部分そのものだからです。感染症流行によって露わになりつつある不平等や社会・国際秩序の変化が現在進行形で動いています。人々の連帯と協力の可能性など、いま移行しつつある「コロナ後の世界」、あるいは「ウィズコロナの世界」はこの大きな潮流を見つめることに他なりません。その中でアメリカがどのような役割を担っていくのか。この問題は国際関係、外交にとどまらず、歴史、文化、文学など私たちの専門にも深く関連します。コロナ禍はアメリカ学会にとっては重要な研究課題が与えられたのかと感じております。

まだ困難もあるかと思いますが、事務作業の充実と効率化、次世代の研究者の育成を狙った若手会員への支援の強化、年次大会の国際化、事務体制の充実等をはじめとする種々の改革を常務理事の皆さまと共に引き続き力を入れて取り組みたいと思っています。

そして、セキュリティ強化のために導入した新ウェブもようやく運用されます。警察庁への刑事告発を含め、私自身が広報電子化委員長として2017年7月の学会ウェブサイト、メールサーバーへのサイバー攻撃の対応を中心的に行ったのですが、結局犯人は特定できず時効を迎えています。このことは大変残念です。次の大きなトラブルがないように最善の注意で進めて参ります。

アメリカ学会の特徴は学際性にあります。様々なものを受け入れながら、一緒に新しい見識を深めていく部分は本学会の得意とするところです。その多様性と包摂性をさらに推し進めるために、奥田暁代、中嶋啓雄両副会長、および常務理事の皆様のアドバイスをいただきながら、まずは何よりも明るい組織運営を目指してまいります。皆様のご意見やご要望を伺うことを最重要と考えております。学会活動や学会運営への積極的なご参加とご協力を心からお願い申し上げます。

前嶋和弘

2022-2023 年度役員一覧

会長

前嶋 和弘 (上智大)

副会長

奥田 暁代 (慶応義塾大)

中原伸之賞選考委員会委員長兼任

中嶋 啓雄 (大阪大)

中原伸之賞選考委員会委員長兼任

常務理事

櫛田 久代 (福岡大)

会務委員会会務担当

菅原 和行 (福岡大)

会務委員会会務担当

板津木綿子 (東京大)

会務委員会財務担当

麻生 享志 (早稲田大)

年次大会企画担当

菅 美弥 (東京学芸大)

年次大会企画担当

下斗米秀之 (明治大)

年次大会企画担当

渡邊真理子 (専修大)

年報編集委員会

小田 悠生 (中央大)

国際委員会

山岸 敬和 (南山大)

英文ジャーナル編集委員会

佐藤真千子 (静岡県立大)

広報・電子化情報委員会

豊田 真穂 (早稲田大)

斎藤眞賞選考委員会

大串 尚代 (慶応義塾大)

清水博賞選考委員会

理事（選挙選出）

石原 剛（東京大）	石山 徳子（明治大）	伊藤 裕子（亜細亜大）
大串 尚代（慶応義塾大）	大津留（北川）智恵子（関西大）	岡山 裕（慶応義塾大）
奥田 暁代（慶応義塾大）	小田 悠生（中央大）	兼子 歩（明治大）
川口 悠子（法政大）	貴堂 嘉之（一橋大）	坂下 史子（立命館大）
佐久間みかよ（学習院女子大）	清水さゆり（ライス大）	菅 美弥（東京学芸大）
杉山 直子（日本女子大）	舌津 智之（立教大）	竹沢 泰子（京都大）
土屋 和代（東京大）	森口（土屋）由香（京都大）	豊田 真穂（早稲田大）
中野耕太郎（東京大）	西崎 文子（東京大・名）	西山 隆行（成蹊大）
新田 啓子（立教大）	橋川 健竜（東京大）	松永 京子（広島大）
松原 宏之（立教大）	三牧 聖子（同志社大）	矢口 祐人（東京大）
吉原 真里（ハワイ大）	渡辺 靖（慶応義塾大）	

理事（会長推薦）

麻生 享志（早稲田大）	板津木綿子（東京大）	櫛田 久代（福岡大）
佐藤真千子（静岡県立大）	下斗米秀之（明治大）	菅原 和行（福岡大）
中嶋 啓雄（大阪大）	松本 俊太（名城大）	山岸 敬和（南山大）
渡邊真理子（専修大）		

監事

大類 久恵（津田塾大）	小塩 和人（上智大）	佐藤千登勢（筑波大）
-------------	------------	------------

第 57 回年次大会企画・報告募集のお知らせ

第 57 回年次大会は、2023 年 6 月 3 日（土）・4 日（日）に対面（予定）にて開催を計画しています（開催校未定：首都圏を予定）。

つきましては自由論題報告と部会企画案を、下記の通り募集いたします。会員のみなさまの応募をお待ちしております。また、分科会の継続ないし新規開催の申し込みも受け付けております。すべての応募は年次大会企画委員会（program@jaas.gr.jp）宛に PDF ファイルにて、1～3 のうち該当する件名を明記し、各締切日までにお申し込みください。

1. 「自由論題報告申し込み」（締切日：2022 年 11 月 20 日）

I. 申し込み

1) 報告者氏名・所属；2) 報告タイトル；3) 報告内容（和文 1,500 字程度、英文 800 語程度）；4) キーワード 5 つを記載のこと。報告タイトル・内容は、発言言語に準ずることとします。報告内容は未発表のものとし、すべての応募について審査を行い、結果は 1 月上旬までにお知らせいたします。なお、提出された企画案については、受理後の変更はできません。

II. 応募資格

自由論題での報告は、海外在住者（下を参照）を除き、会員のみとします。非会員による申し込みは、締め切り日までに入会手続きを行っている場合のみ暫定的に受理し、入会が認められ、会費納入が確認された時点で正式受理とします。

* 自由論題報告は 2 年連続でできますが、3 年連続ではできません。

〈海外在住の非会員〉第 52 回年次大会より、海外在住者（国籍不問）は、非会員でも自由論題報告が一回にかぎり認められることになりました。ただし、報告にあたっては、大会参加費（8,000 円）の支払いが必要となります。支払方法については、報告が認められた際に通知いたします。なお、支払われた参加費は、いかなる理由においても返金いたしません。

III. 報告にあたり

報告決定者は 2023 年 5 月 14 日までに、フルペーパー（和文の場合は 8,000 字～12,000 字、英文の場合は 5,000～7,500 words 程度）を提出していただきます。提出されたペーパーはパスワード化し、学会ホームページにて学会員のみ閲覧・ダウンロードできるようにいたします。

2. 「部会の企画提案」(締切日: 2022年9月11日)

I. 申し込み

1) すべての登壇予定者氏名・所属(責任者を明記); 2) 部会タイトル; 3) 内容(和文800字程度, 英文400語程度)。報告タイトル・内容は, 発表演語に準ずることとします。企画内容は未発表のものとし。すべての応募について審査を行い, 結果は12月下旬を目処にお知らせいたします。なお, 提出された企画案については, 受理後の変更はできません。

II. 応募に際して

- 1) 前回大会での部会・シンポジウム・ワークショップでの登壇者は, 次年度での部会報告はできません。司会者, 討論者としての応募も避けるようにしてください。
- 2) 登壇者の過半数は学会員であることとします。
- 3) 司会担当者は, 学会員としてください。他の登壇者への連絡等をお願いするためです。
- 4) 非会員の部会登壇者への謝金, 交通費等の支払いは, 学会としては行いません。必要な場合には, 科研費等をご使用ください。
- 5) 登壇者を選定するにあたっては, 地域バランス・性別構成等にご配慮ください。
- 6) 学際性のある企画を歓迎いたします。ただし応募条件ではありません。
- 7) 大学院生や学位取得後間もない研究者の応募を歓迎いたします。

III. 報告にあたり

登壇決定者は2023年3月31日までに, 報告要旨(和文の場合は600字~800字, 英文の場合は300~400 words程度)を提出していただきます。提出されたペーパーは, 学会ホームページにて一般閲覧・ダウンロードできるよういたします。

3. 「分科会開催の申し込み」(締切日: 2022年8月31日)

分科会については, 2023年度もオンライン開催とさせていただきます。使用するオンライン・メディア(ズーム等)については, 原則各分科会でご用意いただくをお願いいたします。どうしてもご用意いただけない場合には, 年次大会企画委員会にご相談ください。

I. 申し込み

新規申し込み: 1) 分科会趣旨(和文350~400字); 2) 責任者氏名・所属・連絡先(メールアドレス); 3) 賛同者氏名・所属(5名)

継続申し込み: 1) 継続趣旨(和文100~200字); 2) 責任者氏名・所属・連絡先(メールアドレス)
開催可否については, 12月下旬を目処にお知らせいたします。

II. 開催にあたり

開催が認められた分科会については, 2023年2月15日までに, 企画提出依頼書(書式あり, 後日送付)にて,
1) 分科会の内容(報告タイトル等・日英両言語にて記載); 2) 報告者氏名・所属(日英両言語); 3) 内容紹介/報告要旨(300~400字程度, 使用言語のみ); 4) 開催予定日(2023年5月29日から6月4日までの日時から任意でお決めください—ただし, 年次大会プログラムと重ならないようお願いいたします); 5) 使用するオンライン・メディア(ズーム等)とセッションIDをお知らせいただけます。

年次大会企画委員会

アメリカ学会 2021年度事業報告

1. 会員数

2021年度は会員の会費納入歴を検証のうえ, 規約第2章6条(5)「年会費を3年間滞納すると退会処分となる」に基づき10名を除名した。他方で, コロナ禍ではあるが, 学会誌の編集, オンラインによる学会開催を行い, 多くの新入会員を迎えることができた。一方で上記を含めた退会者もあり昨年度より微減した。

2022年3月31日現在の会員数は1037名(一般会員913名, 院生会員96名, 海外会員9名, 名誉会員6名, 維持会員13社)。異動内訳は以下のとおり。

〔前年度末1045名〕

新入会員 30名(一般20名, 院生9名, 維持0団体, 海外1名)

退会員 38名(除名10名, 逝去1名, 希望退会27名)

2. 理事・監事の改選

2022年1月31日を締め切りとして理事・監事選挙を実施し、菅美弥・下斗米秀之両会員の立ち会いのもと2月20日に開票した。投票総数は158票となり、集計の結果、理事については上位32名が選出され、監事についても得票順に3名を選出した。

3. 会務委員会

学会運営と財務適正化を図り、会員の動静把握と会費納入の促進に尽力した。また、理事・監事選挙を行った。新型コロナウイルス感染防止のため、常務理事会はオンラインで行った。

4. 年次大会企画委員会

(1) 第55回年次大会

前年に引き続き、兼子歩会員が企画委員長を担当した。新型コロナウイルス感染症（COVID-19）拡大防止の必要に鑑みて、2020年6月5日（土）、6日（日）に慶応義塾大学の協力を得て完全オンラインにて年次大会を開催した。1日目にはASAK会長による基調講演およびシンポジウムを開催した。2日目はOAH-JAASの短期滞在プログラムが延期とされたために、ワークショップはASAKとの企画のみ開催され、4つの部会を開催した。オンライン大会のため、若手旅費補助は行われなかった。

(2) 第56回年次大会

麻生享志会員を企画委員長として、対面を基本として2022年6月4日（土）、5日（日）に中央大学多摩キャンパスにて開催した。1日目にはJAASとASAKの会長による基調講演とシンポジウムが開催され、2日目にはワークショップ2つと部会4つが開催された。分科会はオンライン開催とした。一部の報告はオンラインによる参加となり、またいくつかの企画はオンライン同時配信も並行して行った。なお、若手旅費補助は応募期日までに応募者がなく行われなかった。

5. 年報編集委員会

(1) 『アメリカ研究』（第56号）を従来の3月に戻し発行した。

(2) 『会報』については206号、207号、208号を例年通り刊行した。

(3) 中断していたJ-STAGEでの論文公開を過去に遡り再開した。

(4) 英文ジャーナル編集委員会と共にアメリカ学会の著作権ポリシーを策定し、公開した。

(5) 中原伸之賞受賞作についても清水博賞受賞作にならない、長文書評を掲載することが常務理事会にて決定されたことに伴い、第57号に過去の分も含め、掲載する予定である。

6. 英文ジャーナル編集委員会

2021年6月より、編集長橋川健竜会員、副編集長山岸敬和会員で編集委員会を運営し、年3回の編集会議を行っている。各号の特集テーマ選定に加え、査読や校正が委員メンバーに課せられた主たる業務である。2022年刊行予定の第33号は刊行作業が最終段階にあり、“Mobility/Immobility”を特集テーマに8本の論文が掲載される。2023年刊行予定の第34号については“Division, Diversity, Unity”を特集テーマに定めて公表するとともに、投稿論文の査読を開始している。

7. 清水博賞選考委員会

第27回清水博賞を1名に授与した。

8. 斎藤眞賞選考委員会

第7回斎藤眞賞を2名に授与した。

9. 中原伸之賞選考委員会

第3回中原伸之賞を1名に授与した。

10. 広報・電子化情報委員会

年間を通じて学会ウェブサイトの管理と更新ならびにメーリングリスト（ML）の管理を行い、各種広報戦略業務について協議を進めた。管理サイトへの不正アクセスは発生していないが、以下のような問題に対処した。

(1) MLの未着問題

新規登録した方々に5月6日配信のメール [JAAS:74] が未達であったことが判明した。通常、メールアドレスの新規登録や変更届けは、学会事務局で月ごとに取りまとめられ、翌月初旬に広報・電子化情報委員会へ届き、即日～翌日中にMLに登録されている。しかし、この時は5月大型連休を挟んだため、学会事務局から広報・電子化情報委員会に情報が届くまでいつもより日数がかかり、MLへの登録が遅れた。このようなことを防ぐには、学会事務局に新規登録・変更届の確認頻度を増やしてもらう必要があるが、それには契約業務の内容と費用

の変更が伴う。大型連休以外の時は、ML登録のタイミングによる問題は起きていないため、学会事務局の確認頻度は月1回そのまま様子を見ることとなった。

また、メールアドレスの新規登録・変更届が処理されるタイミングを会員にお伝えしていなかった点を改め、届けがあった際、学会事務局から「メーリングリストへの登録は翌月上旬になる」ことを周知いただくこととした。MLを配信する各委員会の方々にも、発信するタイミングは急ぎでない場合、月末よりも月初めの方が望ましいとお知らせした。

(2) MLのブラックリスト問題

MLが迷惑メール扱いされる問題について、原因究明と問題改善に取り組んだ。調査の結果、メールサーバーのIPアドレスがブラックリスト登録に含まれていることが判明した。2021年7月20日にサーバーレンタル元のWADAXカスタマーサポート(GMO)へブラックリストの解除依頼を出し、解除されたとの報告を7月22日に受けた。さらに、広報・電子化情報委員会でもIPアドレスおよびドメインがブラックリストに登録されていないことを二重に点検した。

以後、ブラックリスト問題は解消されたと思われたが、しばらくして一部の会員から迷惑メールに振り分けられているとの情報が届き始めた。そのため、レンタルサーバーの更新やセキュリティ対策の強化が不可欠と判断した。

(3) 学会ウェブ・システムのリニューアルについて

かねてより懸案であった学会ウェブ・システムのリニューアルに着手した。これまで、できる限りのセキュリティ対策を施してきたが、専門業者に相談した結果、現状のサーバーはセキュリティに問題があり、より高度なセキュリティ対策を備えたウェブ・システムへ更新する以外に改善方法がないことが明らかになった。そのため、現行のGMO(Wadax)と複数の業者のサービス内容や料金等を比較検討してビッグバンテクノロジー株式会社(AcomaWeb)を選定し、同社との新規契約について2022年3月の常務理事会で承認を得た。現在、ウェブ更新のための準備を進めている。第56回年次大会後に現行サーバーから新サーバーへの情報移行作業に取り組み、夏頃を目処として新しいホームページとMLの運用開始を予定している。

11. 国際委員会

(1) 2021年度行事について

① 2021年度JAAS年次大会にてASAKとのワークショップ“Politics of Gender and Sexuality”を開催した。

② ASAとの共同プロジェクトとして、2021年6月にオンラインでプロセミナーを開催した。

③ ASAKの年次大会(2021年10月29日~30日、オンライン開催)で竹沢泰子副会長、有光道生会員が報告した。

(2) アメリカ学会海外渡航奨励金

2021年度後期募集において、1名に15万円を給付した。

(3) 2021年度ASA年次大会委員派遣、日米友好基金の大学院生補助給付

2021年度年次大会は、2021年10月11日~14日にオンラインで開催された。オンライン開催につき、国際委員は出張せず、日米友好基金による留学中院生向けの大会参加費用補助金も支給しなかった。

(4) 日米友好基金給付金による、ASAからの2021年度JAAS年次大会招聘者

2021年度招聘研究者をUniversity of Minnesota, Twin CitiesのMartin F. Manalansan IV氏およびNotre Dame UniversityのJason Ruiz氏に決定した。なお、Manalansan氏はビデオ報告となった。

(5) 日米友好基金給付金による、OAH研究者短期滞在プログラムのゲスト研究者

専修大学(2022年5月27日~6月18日)にUniversity of Rhode IslandのErik Loomis氏、大妻女子大学(同5月30日~6月16日)にNortheastern State UniversityのFarina King氏が決定した。両氏の来日は2020年からの繰延である。

(6) 2022年度OAH年次大会での共催パネル開催、委員派遣、日米友好基金の大学院生補助給付

2022年3月31日~4月3日にボストンで開催された年次大会における、OAH委員会との共催パネルにおいて、和泉真澄会員(同志社大学)と李里花会員(中央大学)がオンラインで報告を行なった。国際委員の出張は取りやめた。また、日米友好基金による、留学中院生のための会参加費用補助金への応募者は0名であった。

(7) ASAK研究者2021年度JAAS年次大会招待者

2021年度JAAS年次大会には、Lim, Seong-Ho会長がビデオ講演で参加。

(8) 2023年OAH研究者短期滞在プログラムのホスト校決定

愛知県立大学(担当:久田由佳子会員)、明治大学(担当:兼子歩会員・鰐淵秀一会員)に決定した。

(9) 2022年度JAAS年次大会ワークショップA/Bの決定

2022年度JAAS年次大会で開催されるワークショップA/B“Transnational Contact and Human Mobility”を決定した。

(10) 2021年度プロセミナー開催

2022年6月4日に中央大学でプロセミナーを開催した。

2021 年度決算及び 2022 年度予算

総会において 2021 年度決算及び 2022 年度予算についてご承認をいただきました。ここに収支報告および予算案を掲載し、会員各位へのご報告とさせていただきます。なお、2021 年度の収支報告は、出納帳その他の関連書

類とあわせて、増井志津代、小檜山ルイ各監事の監査を受け、適切と認める旨の監査報告書が提出されていることをご報告いたします。

(財務担当 西山隆行)

アメリカ学会 2021 年度収支報告

科 目	2021 年度予算 (a)	2021 年度決算 (b)
1. 年会費	8,200,000	8,538,000
2. 雑収入	400,000	402,984
3. 広告収入	30,000	0
4. 寄付金	0	0
5. アメリカ研究振興会助成金	900,000	900,000
6. 日米友好基金 (OAH)	2,000,000	0
7. 日米友好基金 (ASA)	440,000	0
小 計 (A)	11,970,000	9,840,984

□支出の部

科 目	2021 年度予算 (a)	2021 年度決算 (b)
1. 会計費	4,280,000	3,685,733
01) 事務局人件費	600,000	643,395
02) 業務委託費	2,000,000	1,554,637
03) 常務理事会費	300,000	0
04) 会費郵送通信費	130,000	43,862
05) 事務用品費	100,000	3,741
06) 広報・電子化情報委員会費	500,000	504,311
07) 名簿作成費	0	0
08) 選挙関連費	400,000	683,935
09) 口座振替・郵便振替手数料	150,000	123,990
10) 会務雑費	100,000	127,862
2. 研究事業費	7,800,000	3,579,864
01) 年次大会費	100,000	9,658
(1) 大会費	100,000	9,658
(2) 企画委員会費	0	0
(3) 非定職者旅費補助	0	0
02) 国際交流費	1,400,000	150,000
(1) 国際交流活動費	0	0
(2) OAH 短期滞在	0	0
(3) ASA 年次大会派遣	600,000	0
(4) ASAK 年次大会招聘	0	0
(5) OAH 年次大会派遣	300,000	0
(6) 海外渡航奨励金	500,000	150,000
03) 年報刊行費	3,000,000	1,675,727
(1) 年報編集委員会費	200,000	31,977
(2) 年報印刷費	1,200,000	720,313
(3) 年報郵送通信費・雑費	300,000	162,402
(4) JSTAGE 公開費	1,300,000	761,035
04) 英文ジャーナル刊行費	1,700,000	1,002,601
(1) 英文編集委員会費	100,000	0
(2) 英文印刷費	1,000,000	601,705
(3) 英文郵送通信費・雑費	100,000	131,396
(4) コピーエディター雑費	500,000	269,500
05) 会報刊行費	700,000	629,043
(1) 会報印刷費	300,000	259,303
(2) 会報郵送通信費	300,000	369,740
(3) 会報雑費	100,000	0
06) 清水博賞委員会費	300,000	51,313
07) 斎藤眞賞委員会費	50,000	0
08) 中原伸之賞委員会費	300,000	61,522
09) 研究教育支援費	150,000	0
10) 研究事業予備費	100,000	0
小 計 (B)	12,080,000	7,265,597
当期収支差額 (A - B)	△ 110,000	2,575,387
前期繰越金 (C)	18,807,264	18,807,264
次期繰越金 (A - B + C)	18,697,264	21,382,651

アメリカ学会 2022 年度予算案

科 目	2022 年度予算案 (b)
1. 年会費	8,400,000
2. 雑収入	400,000
3. 広告収入	30,000
4. 寄付金	0
5. アメリカ研究振興会助成金	1,000,000
6. 日米友好基金 (OAH)	2,200,000
7. 日米友好基金 (ASA)	500,000
小 計 (A)	12,530,000

□支出の部

科 目	2022 年度予算案 (b)
1. 会計費	3,630,000
01) 事務局人件費	650,000
02) 業務委託費	1,700,000
03) 常務理事会費	300,000
04) 会費郵送通信費	130,000
05) 事務用品費	100,000
06) 広報・電子化情報委員会費	500,000
07) 名簿作成費	0
08) 選挙関連費	0
09) 口座振替・郵便振替手数料	150,000
10) 会務雑費	100,000
2. 研究事業費	9,240,000
01) 年次大会費	300,000
(1) 大会費	300,000
(2) 企画委員会費	0
(3) 非定職者旅費補助	0
02) 国際交流費	3,740,000
(1) 国際交流活動費	340,000
(2) OAH 短期滞在	1,850,000
(3) ASA 年次大会派遣	700,000
(4) ASAK 年次大会招聘	0
(5) OAH 年次大会派遣	350,000
(6) 海外渡航奨励金	500,000
03) 年報刊行費	1,850,000
(1) 年報編集委員会費	200,000
(2) 年報印刷費	1,200,000
(3) 年報郵送通信費・雑費	300,000
(4) JSTAGE 公開費	150,000
04) 英文ジャーナル刊行費	1,950,000
(1) 英文編集委員会費	200,000
(2) 英文印刷費	1,000,000
(3) 英文郵送通信費・雑費	150,000
(4) コピーエディター雑費	600,000
05) 会報刊行費	700,000
(1) 会報印刷費	300,000
(2) 会報郵送通信費	400,000
(3) 会報雑費	0
06) 清水博賞委員会費	300,000
07) 斎藤眞賞委員会費	0
08) 中原伸之賞委員会費	150,000
09) 研究教育支援費	150,000
10) 研究事業予備費	100,000
小 計 (B)	12,870,000
当期収支差額 (A - B)	△ 340,000
前期繰越金 (C)	21,382,651
次期繰越金 (A - B + C)	21,042,651

会員のみなさまにお願い

ご住所・所属等の変更が生じた場合には、速やかに事務局 (office@jaas.gr.jp) までお知らせください。また、メールアドレスを登録されていない方は、極力ご登録くださいますようお願いいたします。

久保文明・中山俊宏・山岸敬和・梅川 健 編
『アメリカ政治の地殻変動——分極化の行方』

(東京大学出版会, 2021年, 5,060円)

本書は、23人の執筆陣からなる(全22章+序論)、300頁を超える大著である。同書が論じているのは、現在のアメリカにおいて、半世紀ほど前から、緩やかにしかし確実に進行している、「分極化」という事象である。同じ趣旨で刊行された、五十嵐武士・久保文明編『アメリカ現代政治の構図』(東京大学出版会, 2009)が全10章・10人の執筆者で構成されていたことと比べれば、今や現代のアメリカ政治のあらゆる事象に分極化が関わっていることがよくわかる。

本書への論評を一言でいえば、「正統な学術書」ということになる。制度と社会を対置させ、その後で政策の話を中心とする構成は、日本でもアメリカでも、アメリカ政治の研究や教育の基本とあって良いであろう。本書はこれを、制度(第1部:第1-5章)・社会(第2部:第6-9章)・政策(第4部:第14-19章)に関する論考を並べることでおさえている。同時に、本書ならではの特徴も見られる。1つは、制度と社会をつなぐものとして、「政治的インフラストラクチャー」を論じる第3部(第10-13章)を置いていることである(実はアメリカ本国の、とくに科学的なアメリカ政治研究は、この分野が手薄である。詳しくは、久保文明編『アメリカ政治を支えるもの』(日本国際問題研究所, 2011))。もう1つは、今後の長期的な展望にまで視野に入れて、公民教育や思想を論じる第5部(第20-22章)が、本書全体を締めていることである。

他方、消費者としては、各論考の字数が少ないことは指摘せざるを得ない。色々やむをえなかったのかもしれないが、ここは1章あたり2万字程度・2巻本で出してもらいたかった。分極化はアメリカ政治全般にまたがる巨大な事象であるのだし、アメリカでは、たとえば既に2000年代には、分極化全般を論じる共著本が2巻本で出ている(Nivola, Pietro and David W. Brady eds. *Red and Blue Nation?* (Brookings Institution, 2006/2008))。本書の続きは、各章の筆者の他の業績を読むことが期待される。しかし、最終章「思想」を執筆された中山俊宏先生の今後の論考を読むことはできない。謹んでお悔やみ申し上げると共に、中山先生の同書および過去の御論考から改めて学びたい。

アメリカ政治を専門とする読者には、本書こそが今後学ばれかつ乗り越えられるべき基礎であると述べておく。アメリカ・政治学いずれか一方を専門とする読者におかれては、アメリカの基礎は政治であり、政治学(とくに現代を論じる)の本国はアメリカなのだから、本書に書かれていることぐらいは、極力踏まえて頂ければ良いかと思う。いずれの立場にとっても、本書がアメリカ政治研究のスタンダードとして読まれ、引用される状況が、今後10年は続く予想される。

松本俊太(名城大学)

山本秀行・麻生享志・古木圭子・牧野理英 編著
『アジア系トランスボーダー文学

——アジア系アメリカ文学研究の新地平』

(小島遊書房, 2021年, 3,190円)

本書はベテランから若手まで豪華執筆陣16名による論文を収め、AALA(現アジア系アメリカ文学研究会)を中心に展開してきたアジア系アメリカ文学(以下AA文学)研究の今を見渡せる論集となっている。タイトルに「トランスボーダー」を掲げ、ポスト・グローバル化時代におけるAA文学研究を包括的に捉えようと「領域的・地理的トランスボーダー」「ジャンルのトランスボーダー」「トランスボーダー化する研究」という視点から3部構成をなす本書を貫く真のテーマは、交差/インターセクショナルリティと云ってよい。

「インターセクショナルリティ」という概念は、「黒人&女性」「アジア系&LGBTQ」といったように交差を可視化することによって、差別をめぐる議論の単純化を阻み、弱者への理解を促進させるために用いられてきた。しかし本書において、それはAA文学の多様性と豊かさを構造的に明示する補助線となっている。たとえば巻頭の麻生論文は、ヴェトナム系ディアスポラという補助線によって人口大量移動時代の1.5世代文学の展開と現状を明らかにし、スイシンファーの作品を扱う松本論文は今日の研究視座から初期AA文学の役割を再評価する。移民地文芸を補助線とする水野論文は移民文学の伝統継承に立ちはだかる言語の壁を浮き彫りにし、翻案という視点を導入する宇沢論文にはAA文学がはらむ二重性の隠喩をニューヨークと東京の地図の二重写しに読み取ることができる。

南アジア系とポストコロニアル理論(志賀論文)、インターテクスチュアリティ(牧野論文)、SF・思弁小説(巽論文)、グラフィック・ノベル(中地論文)、セクシャル・マイノリティ(渡邊論文)、実験詩(風早論文)、原爆文学(松永論文)、エコクリティシズム(岸野論文)、演劇(古木論文)、先住民(加藤論文)、人種ハイブリディティ(ウォント盛論文)、そしてアフリカ系アメリカ文化(山本論文)という補助線とAA文学・文化との交差点には、文学の豊かさと研究の可能性に開かれたさまざまな問題系が浮かびあがる。なかでも、インターセクショナルリティ的視点の導入により加害と被害の関係の複雑さを明示してみせた松永論文と加藤論文は、とりわけ洞察に富んでいる。

いうまでもなく、各章は個別の作家論やジャンル論としても読める。ただ、個々の論文に注目するよりもむしろ全体として読まれるべき論集であることを強調したい。そうすることで見えてくるAA文学研究の視座の広がり、そこを交差する補助線の多様性が、国民文学の枠を超えて文学を研究するためのヒントと、その目指すべき方向性を示唆してくれるのだから。AA文学研究者のみならず、広く文学を研究対象とする人々に手にとってほしい本だ。

吉田恭子(立命館大学)

久野 愛 著

『視覚化する味覚——食を彩る資本主義』

(岩波書店, 2021年, 1,034円)

数年前、ピンク色のカレー、青色の醤油が発売され、SNSを中心に日本でも話題となった。まさに、「色」とビジネスが直結する事例であり、人々が特定の食品から想起する「色」を共有していることから成り立つものであるが、本書は、その「色」と食品との政治的な関係性を、歴史のおよび文化的な背景を丁寧に追いながら、明らかにしている。とりわけ、「自然な色」が決して「自然」ではなく、「人工的」である事例が数多く提示され、明快な論理展開に読者も引き込まれていく構成となっている。

第1部は、19世紀末から20世紀初頭のアメリカを中心として、食品の「色」がどのように受容され生成されてきたかが、歴史的に辿られている。第1章では、食にまつわる「感覚」が、味覚だけではないことが指摘され、とくに視覚的情報を担う「色」へと読者の関心を誘う。第2章は、「色」が科学的に考察・分析されるようになり、食品業界が「色」を広告で使用することに重きを置いていく過程が明らかにされる。そして、第3章は、「色」を左右する合成着色料の登場に焦点が当てられ、安全性をめぐる法的に規制されるまでの歴史的な過程が追われ、食品関連企業と法を整備する政府との深い関係が検証されている。

「食品の色が作られる『場』」と題された第2部は、バナナやオレンジの「色」が価格を左右するようになり、果物の生産現場が「色」に囚われ始める章から始まる。消費者が求める「自然な色」にするために、オレンジの皮に着色料が使用される事例は、究極であろう。続く第5章において、「色」をめぐる対決は、連邦政府や州政府を巻き込んだバター対マーガリンとなる。双方の生産者が消費を促進するため、消費者が想起する「自然な色」を「人工的に」作り出す過程は、ある意味滑稽でもある。その「色」へのこだわりが、家庭という「場」へ浸食していく様子が描かれているのが第6章である。料理を作るという行為だけでなく、作る料理の見た目もジェンダー化され、「女性らしい」色合いが求められるようになる。そして、第7章では、小売店へと場が移り、食品の陳列における視覚的效果に重点が置かれて分析されている。

第3部に入り、「自然性」を追求した1960・70年代の対抗文化さえも、「アースカラー」の産出に繋がっているという第8章の指摘は興味深い。最終章では、視覚に依存するネットスーパーの拡大や、「映える」という視覚から情動を引き出す食が重視される現状が検証されている。歴史的に構築されてきた「色」に依拠しつつも、もはや産業界だけでなく個人が「色」を創出する時代であることが分かる。

本書は、時折盛り込まれるコラムも面白く、日米に通底する諸相に読者の意識を向かわせる。近年、食に関する研究書が続々と出版されているが、「色」という身近な視座から切り込んで、様々な視角を提示する本書は、読みやすいうえに示唆に富んだ良書といえよう。

北脇実千代 (日本大学)

黒崎 真 著

『マーティン・ルーサー・キング

——非暴力の闘士』

(岩波書店, 2018年, 902円)

公民権運動研究において、マーティン・ルーサー・キング・ジュニアを運動の中心に描くのではなく、無名の民衆も含めて多くの人々が様々な方法で行動を起こしていたと捉える見方が主流になって久しい。「マーティンが運動を作ったのではなく、運動がマーティンを作りあげた」という有名なエラ・ベイカーの言葉があるように、公民権運動はまさに多様な運動のかたちがあり、それらがキングに影響を与えていた。しかしそうしたなかでも、キングが人種やジェンダー、さらには世代の異なる人々に問題の本質を伝える能力に長けていたのは間違いない。

本書はそんなキングを英雄視することなく、弱点もある普通の人間と捉えて、だからこそ私たちに希望と勇気を与えてくれるという視点から描かれたキングの評伝である。歴史学を専門とし、キングも学んだボストン大学で神学を研究した著者が本書で焦点に当てたテーマは「非暴力」であった。キングと非暴力の関連性は一見すると、あまりにも自明のように聞こえるかもしれない。しかし、キングの非暴力主義には誤解やまだまだ知られていないことが多い。そのため、本書ではキングが非暴力をいかに会得し、そして運動の中でどのように実践していたのかという点に注目している。

本章の構成は以下のようになっている。第一章では、キングがいかにして牧師の道に進んだか、ということをも黒人教会の伝統とキングの家系から検討している。第二章では、キングを全国的に有名にしたモンゴメリー・バス・ボイコットからフリーダム・ライドまでの運動の中で、キングがいかに非暴力を学び、実践していたかを考察している。第三章では、オールバニー闘争から1964年公民権法の成立と投票権法に向けた活動に注目する。本章では運動が「失敗」したことからもキングが学び、公民権運動の絶頂期と言えるワシントン行進とその後の公民権法の成立が検討されている。第四章ではセルマ運動から北部での運動であるシカゴ自由運動までのキングの活動を描いている。第五章はブラック・パワーの台頭から、経済的正義と人種差別の問題に取り組んだ貧者の行進に向けた努力までを検討している。最後の第六章では、メンフィスの黒人清掃労働者の活動支援からキングの暗殺事件が描かれ、晩年のキングの活動の重要性が強調される。さらに、その後のキングの祝日制定過程と2011年にワシントンDCに完成したキングの記念碑を取り上げて、公的記憶としてのキングの問題性を考察している。

本書は近年の研究成果を取り込みながら、キングが最終的に生き方にまで昇華させた「非暴力」に着目し、キングと黒人神学を研究してきた著者ならではのキング像が描かれている。本書が黒人史を専門とする研究者だけでなく、多くの研究者の必読書となるのは間違いないだろう。

武井 寛 (岐阜聖徳学園大学)

牧野理英 著

『抵抗と日系文学』

——日系収容と日本の敗北をめぐる——

(三修社, 2022年, 3,960円)

本書が指摘するように、日系アメリカ文学は、アジア系アメリカ文学の一部と見なされ、「迫害されし民族のプロテスト」として読まれてきた一面がある。これに対し本書は、日系アメリカ文学を英米の「エスニック文学」という枠に留めおくことなく、「日系」という、時にトランスナショナルな視座から捉え直す。同時に「日系」の個々の書き手がエスニック集団の集合的記憶との間に「距離（ディタッチメント）」を創出しながら語る「抵抗のナラティブ」に着目することにより、日系（アメリカ）文学に対する従来の「読み」や理解に一石を投じているといえる。

本書で論じられている主な書き手は、日系収容経験のあるヒサエ・ヤマモト、ワカコ・ヤマウチ、そして戦後のポストメモリーの書き手であるカレン・テイ・ヤマシタ、カズオ・イシグロ、ジュリエット・コーノである。これらの書き手がそれぞれ「アメリカ」や「日本」という国家、あるいは共同体との「距離」において、いかなる主体的位置を築き、それをどのような文学表現として昇華させているのか。それを詳らかにする周到な議論そのものが、それぞれの文学を、集団的トラウマあるいは世代間トラウマの範疇に封じ込めようとする力学から解放する「読み」のプロセスのようにも思われる。

また、ヤマモトの『ベニト・セレノ』論やヤマウチとアメリカ南部文学、そしてヤマシタとメルヴィル、コーノとエリザベス・ビショップの接点といった、それぞれの書き手を他の作家や作品と比較する考察からは、エスニック文学という枠を超える日系文学の普遍性につながる展望が得られるが、ここには、19世紀アメリカ文学研究の正統な礎の上に積み上げられてきた著者の文学研究の厚みが窺える。

さらに、本書における「読み」が、日系文学を軸としながら、第二次世界大戦中の日系収容に関する歴史学的アプローチはもとより、ヤマシタの文化人類学的な視点とJ・クリフォードの著作の関係、イシグロと原爆文学、コーノとエコクリティシズムなど、多様な批評理論やジャンルの枠組みを解釈に援用している点も注目に値する。とりわけジェンダー論の洞察は深く、「エスニック文学」でも重視されてきた「母娘関係」のモチーフが、より複雑なニュアンスを伴いつつイシグロの『遠い山なみの光』やコーノの『暗愁』といった小説にも通底していることを示す議論は示唆に富んでいる。

全体として、これだけ多様な知識と情報、そして巧緻な解釈を、論理の破綻なく「抵抗のナラティブ」という観点に集約させた著者の筆力は圧巻というべきであろう。著者を日系文学研究へと導いたという小説『ぶらじる丸』を著したヤマシタは、2021年に全米図書財団から功労賞（Lifetime Achievement Award）を授与された。ヤマシタに始まり、日系文学全体へと視野を広げる著者の研究は、ヤマシタ研究の更なる進展とともに今後も一層深化していくにちがいない。

喜納育江（琉球大学）

大串尚代 著

『立ちどまらない少女たち』

——〈少女マンガ〉的想像力のゆくえ——

(松柏社, 2021年, 2,750円)

1990年代末、アメリカ文学を学び始めた頃、授業中、ある先生から「アメリカ文学において、少年たち（男たち）は成熟した女性たちから逃げる」のがひとつの基本形であることを教わった。『ハックルベリー・フィンの冒険』のハックや『キャッチャー・イン・ザ・ライ』のホールデンに自分を仮託することにまったく抵抗感のなかった私は、ふと不安になった。授業の後で先生に「では少女たちはどうするのですか？」と質問しに行ったところ、先生は「女の子は狂うか死ぬんじゃないかな」と言われた。その言葉は先生が言われた文脈からすぐさま離れて、軽い呪縛となってふわふわと私につきまとうことになった。少年と同じようにここではない場所を求めて飛翔していたと思込んでいた少女たちは、いつの間にか脱落してしまうの？ 狂わず死なずして逃げのびることはできないのかもしれない？ と。その頃に大島弓子の作品で天真爛漫な少女のまま主人公のいちごが死んでしまう『いちご物語』を繰り返し読んだのはそんな呪縛からかもしれない。

本書は、確かに自分も含め多くの人々が同時に吸収していたはずの少女マンガとアメリカ文学（とりわけ児童文学）を、丁寧な解釈と的確な引用を支えに時系列で語り通すことによって接合し、少女マンガの主人公たちがここではない場所を求め、（本書に引用されている吉田秋生の言葉を借りれば）「なんでもアリアリ」の想像力を飛翔させ、今もおお荒野をめざし続けていることを鮮やかに示してくれる。本書を読むと、教訓的なアメリカの家庭小説・感傷小説のテキストが、少女マンガによって再解釈されることで、それらが女性たちに許された表現・期待される振る舞いの中で隘路を探りあてながら自己を表出させていることが血肉の通った実感となってくる。そしてまた同時に少女マンガもそれらの小説と同様に、隘路をたどり「少女」を成長させ続けていることがわかる。著者の導きなしに、『いちご物語』に耽溺しながら呪縛にはまり続けた自分ひとりでは、その隘路を到底辿っていくことができなかっただろう。著者は、時には他者（恋愛）に自己評価を委ねてしまうこともある少女たちを批判せず、少女たちの生き様を信じ肯定する言説を粘り強く探りあてながら言葉を重ねる。本書は少女マンガや小説からの引用が数多いことも特徴だが、その引用の的確さ・鮮明さは、著者がそれらを反芻しそれらに心を動かされてきた証左であろう。

紙幅の都合で数多ある魅力の中からあと一点だけ挙げるとすると、やはり吉田秋生論であろう。それは、少女マンガにおける「少女」はその想像力において「少年」にもなりうるし、ヘミングウェイのハードボイルドな登場人物にも仮託できうという自由さを教えてくれる。そのような〈少女マンガ〉的想像力は何者に対しても開かれているのだ。

宮本 文（専修大学）

アメリカ学会清水博賞第 27 回受賞作品と第 28 回公募のお知らせ

アメリカ学会では、1996 年度から故清水博会員および同夫人からの寄付金を基金として、「アメリカ学会 清水博賞」を設けています。この賞は、主として若手研究者が最初に発表した研究成果の中から、特に優れた作品を毎年数点程度選び、賞状と賞金 5 万円を贈るものです。

第 27 回清水博賞候補作として、2021 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までの期間に出版された著書のなかから、3 点の作品の推薦が寄せられ、厳正な審査の結果、以下の作品に清水博賞が授与されました。

第 27 回受賞作品

吉留公太（神奈川大学）『ドイツ統一とアメリカ外交』（見洋書房、2021 年）

推薦および審査にご協力いただきました会員の皆様に感謝申し上げます。

第 28 回清水博賞選考委員会は、2022 年 1 月 1 日から 12 月 31 日までに出版される作品について、会員諸氏からの積極的な推薦（自薦・他薦）をお願いいたします。推薦作品につきましては、件名を「第 28 回清水博賞候補推薦」として、2023 年 1 月 8 日（日）までに、清水博賞選考委員会宛にメール（shimizu@jaas.gr.jp および pcres@flet.keio.ac.jp）でお寄せ下さい。（両方に宛ててお送り下さい）。

清水博賞選考委員会

アメリカ学会斎藤眞賞第 7 回受賞作品について

「アメリカ学会 斎藤眞賞」は、故斎藤眞会員のご遺族からの寄付金を基金として、2009 年度から設けられました。同賞は授賞を隔年とし、その直近 2 年間の『アメリカ研究』および *The Japanese Journal of American Studies*（英文ジャーナル）に掲載された論文のなかから、若手による優秀な作品に、賞金 3 万円と賞状を贈るものです。第 7 回アメリカ学会斎藤眞賞は、『アメリカ研究』54, 55 号、*The Japanese Journal of American Studies*, 31, 32 に掲載された 31 本の論文を審査対象とし、二段階にわたる厳正な審査の結果、次の二作品が受賞されました。

第 7 回受賞作品

Yushi Yamazaki（山崎 雄史），“Becoming Internationalist Subjects: The Growth of Multiracial Labor Organizing among Japanese Immigrant Communities in California, 1925-1933,” *The Japanese Journal of American Studies* 31 (2020). 富塚亮平「『客問』と『書斎』—空間表象に見るエマソンの家政学」『アメリカ研究』54 号（2020）

斎藤眞賞選考委員会

アメリカ学会中原伸之賞第 3 回審査結果と第 4 回公募のお知らせ

アメリカ学会では、故・中原伸之氏（公益財団法人アメリカ研究振興会理事長などを歴任）からの個人寄付金を基金とし、2019 年度から「アメリカ学会 中原伸之賞」を設けています。この賞は、本学会員の第 2 作以降の単著（年齢制限なし）ないしは本学会員の最初の単著（この場合のみ出版時 50 歳以上であること）のなかから、日本、アメリカ、あるいは世界のアメリカ研究の水準を高めることに貢献できる、深い知見と新しい視座を提供する特に優れた研究書に、賞状と賞金 5 万円を贈るものです。2021 年 1 月 1 日から 12 月 31 日の期間に出版された著作のなかから、自薦・他薦で寄せられた作品を厳正に審査した結果、次の作品が受賞作となりました。

第 3 回受賞作品

南川文里（同志社大学）『未完の多文化主義—アメリカにおける人種、国家、多様性』（東京大学出版会、2021）

また第 4 回中原伸之賞選考委員会は、2022 年 1 月 1 日～12 月 31 日に出版される作品について、会員のみなさんからの積極的な推薦（自薦・他薦）を受け付けます。推薦をいただく場合には、件名を「第 4 回中原伸之賞候補推薦」として 2023 年 1 月 6 日（金）までに、400 字程度の推薦理由（書式自由）を中原伸之賞選考委員会（nakahara_prize@jaas.gr.jp）宛にメールでご応募ください。自薦の場合は 3 冊のご献本を学会事務局に郵送でお願い申し上げます（他薦の場合にも可能ならご献本をお願い申し上げます）。学会事務局は次の通りです。

〒550-0001 大阪市西区土佐堀 1 丁目 4-8 日栄ビル 703A あゆみコーポレーション内アメリカ学会「中原賞選考委員会」
中原伸之賞選考委員会

英文ジャーナル編集委員会からのお知らせ

〈英文書誌投稿についてのお知らせ〉

本学会員が2021年1月～12月に出版した英語著作、英語論文（博士論文を含む）に関する情報を、『英文ジャーナル』第34号に掲載する予定です。英語で執筆された業績について、学会ホームページ http://www.jaas.gr.jp/journal_news_20220529.docx で示されている形式に従ってご記入のうえ、電子メール本文に貼りつけて、9月20日（火）までに学会英文ジャーナル編集委員会宛（engjournal@jaas.gr.jp）にお送りください。指示された形式に従って原稿を作成していただきますよう、お願いいたします。なお、英文ジャーナル掲載の論文については、この英文書誌に収録しないこととなっておりますのでご注意ください。

〈『英文ジャーナル』投稿についてのお知らせ〉

第35号の特集テーマは、“Voices”です。特集テーマの他、自由論題による投稿も受け付けます。投稿原稿応募申し込み（論文要旨）の締め切りは2023年1月8日（日）、原稿締め切りは2023年5月7日（日）です。投稿原稿応募申し込みの記載事項と申込先の詳細について、11月の会報（あるいはそれ以前は学会ホームページ）もご覧ください。投稿者はアメリカ学会の会員に限ります。なお『アメリカ研究』との二重投稿、あるいは日本語、英語を問わず他の雑誌に発表したものと同じ内容の投稿はご遠慮ください。

英文ジャーナル編集委員会

新入会員（2022年6月4日現在）

佐々木智美	南山大学（院）	政 史 社
生駒久美	東京都立大学	文 化 ジ
龔氷怡（GONG, Bingyi）	大阪大学（院）	史 外 科
本田浩邦	獨協大学	経 政 史
藤田将史	東京大学	政 外 経
飯島さや	東京女子大学（院）	文 衆 ジ
ポッター・デヴィッド（POTTER, David）	南山大学	外 日 市民社会
瀧口美佳	立正大学	文 化 環

（* 入会申し込み順。専門領域の略記については、PDF版会員名簿作成用アンケートおよび学会ホームページに記載されている新表記法による）

編集後記

今号では、本編集委員会からの依頼が遅くなった「新刊」についての紹介を取り上げることができた。次号以降でも、同様の事情の新刊紹介が予定されている。

新刊紹介欄でも触れられているように、2022年5月、中山俊宏先生が急逝された。2018-19年度には、本学会の理事をお務めだった。中山先生のご業績は多岐にわたるが、アメリカの保守主義についての思想的研究と、保守主義がどのように政治運動となり、共和党を変え、アメリカの政治と政策を変えるに至ったのかについての一連のご研究は、保守主義研究という分野を切り開いた。

最後に個人的に。様々な研究会やプロジェクトでご一緒し、あたかもきょうだい弟子のように教えていただいた。いまは、ただただご冥福をお祈りするばかりです。

（梅川 健）

2022年7月30日 発行

アメリカ学会

〒550-0001 大阪市西区土佐堀1丁目4-8

日栄ビル703A

あゆみコーポレーション内

Tel: 06-6441-5260 Fax: 06-6441-2055

<http://www.jaas.gr.jp>

発行人 前 嶋 和 弘

編集人 本 合 陽

印刷所 (株)国際文献社

〒162-0801 新宿区山吹町 358-5